

山陽学園大学・山陽学園短期大学における 教学IRの実施状況

2022（令和4）年9月29日

山陽学園大学・山陽学園短期大学 IR推進室

1 大学におけるIRとは

Institutional Research

訳語：機関研究、大学機関調査研究など

- 高等教育機関において、機関に関する情報の調査及び分析を実施する機能又は部門。
- 機関情報を一元的に収集、分析することで、機関が計画立案、政策形成、意思決定を円滑に行うことを可能とさせる。
- また、必要に応じて内外に対し機関情報の提供を行う。

※出典：教学マネジメント指針（2020.1.22 中央教育審議会大学分科会）用語解説



IRのうち教学に関するものを**教学IR**と呼んでいる。

2 山陽学園大学・短期大学における I R 推進室

【組織概要】

- 2016年4月に設置（学校法人山陽学園の組織及び運営に関する規程第8条）
- 従来の企画部を取り込む形（企画部は I R 推進室の部という位置づけ）
 - I R と企画の機能・業務が全体として一体的に進められている。（室長は専門職）
- 主な役割は、科学的根拠に基づく（Evidence-basedな）意思決定の支援
 - 執行部へ情報・分析結果を提供し、大学改革に活かしている。
 - F D ・ S D 研修会等を通じて、分析データを学部や部署にフィードバックし、教育内容や教育方法の改善に活用している。

【主な業務】

- 大学改革のための各種データ収集・分析 ※実績例・その1参照
- 中期、年度計画の策定、実施状況の分析
- 学生を対象とする各種アンケート調査の実施及び結果の分析
 - 学生の入学時アンケート調査
 - 学修行動及びキャンパスライフ調査（達成度、満足度調査を含む）
 - 卒業時アンケート調査
- G P A 等教務データと各種アンケートの関連性の調査・分析
- 退学等の要因調査・分析
- 在学生に対する資格取得状況調査
- テーマを設定した I R レポート（学内教職員向け）の作成・発信
 - 2019年度：見えてきた！山陽学園大学・短期大学の学生像
 - 2020年度：GPAから見た山陽学園大学・短期大学の学生像
 - 2021年度：学修行動と学生生活へのコロナ禍の影響を探る！ ※実績例・その2参照
 - 2022年度：オンライン授業の評価と課題

3 取り組み実績例（その1・学科改革のサポート）

総合人間学部 生活心理学科

2022年4月から
「学び」が進化

- 心理学の基礎理論をベースに、
- ビジネス系の心理学やデータサイエンスの科目を履修し、
- 地域を代表する企業で活躍できる人材を養成します。

1 心を科学する力を身に付ける学び

- 目で見ることも、手で触れることもできない人の心の働きとそれに基づく行動を科学的に理解するために必要な**心理学の基礎理論と調査や統計的分析などの方法論**をしっかりと身に付けます。



2 ビジネスに役立つ心理学の学び

- 応用心理学科目では、消費者の心理や行動の予測、効果的な広告、組織で生じるストレスへの対応など、**ビジネスの中で役立つ実践的な心理学**の科目が充実しています。



大橋 淳紀さん (2017年3月卒業)
株式会社ワークスマイルラボ 営業マネージャー
大学で学んだ心理学を活かし、顧客のニーズを察知することで、全国規模での実績評価で常に上位

3 データサイエンスの基礎をしっかりと身に付ける学び

- データサイエンス※1科目では、**心理学研究だけでなく、マーケティングなどで活用できるデータの収集、分析の知識や技術**（データリテラシー※2）を身に付けることができ、さらに、**AIやビッグデータの活用**などについても学ぶことができます。



※1 データサイエンスは社会にあふれているデータから有益な価値を引き出す学際的な学問です。

※2 企業では、データリテラシーを身に付け、データの分析結果を企業の戦略や企画に結びつけることができる人材へのニーズが高まっています。

4 マイ・ビジョンを実現するための学び

- 専門科目と就職支援科目の履修を通じて、**学びを活かして岡山を代表する企業で生き生きと働く姿（マイ・ビジョン）を描き**、その実現に必要な専門知識をさらに深めていくことができます。

[IR推進室が担った役割] ※企画部の業務と一体的に展開

- 心理学へのニーズ（志願者数の動向）、データリテラシーへの企業ニーズ等の分析
- 学科教員との連携による新たなカリキュラム（スキーム）の提案 など

4 取り組み実績例（その2・データ分析）

【2021年度IRレポート：学修行動と学生生活へのコロナ禍の影響を探る！】

- コロナ禍が本学学生の学修行動や生活に及ぼした影響について、2020年度の「学修行動及びキャンパスライフ調査」の結果を2019年度調査の結果と比較することで、①時間（学習時間など）、②人的交流（教員との関わりなど）、③満足度（大学生活、教育）の3点から分析した。
- なお、1年生（2020年度入学生）は、他の学年以上にコロナ禍の影響を受けている可能性があると考えられるため、学年別の比較も行った。

（参考）学修行動及びキャンパスライフ調査について

- 実施目的：本学学生が、本学の教育や学生生活に対してどのように感じたかなどの実態を把握し、教育改革等に反映させる。
- 実施時期：毎年12月
- 対象者：全在学生（大学1～4年生、短大1・2年生）
- 実施形態：Webまたは用紙の調査票での記名式回答

結果

【コロナ禍の影響分析のまとめ（抜粋）】

- 総括的に言えば、コロナ禍によるマイナスの影響としては、学生のアバイトやクラブ・サークル活動の時間数の減少、1年生にとっては親しい友人をつくる機会や教員との交流する時間の減少などが見て取れたが、全学的には満足度などは基本的に向上しており、本学の対応は、概ね適切であったのではないかと考えられる。
- また、授業に関する学習時間数が全ての学科で増加していることは評価されるべきである。